

食に関する日常生活内のちょっとした工夫に関連し、本章の4節において『フードピクト』を紹介している。この『フードピクト』は、これまでの言語表記のみとは異なり、使用した食材などを、イラスト(ピクトグラム)を用いて表示するのである。これは、食事提供をする側にとっても、選択する側にとっても容易で、言語での対応が困難な場合でも相手に簡単に伝えうる方法である。このような工夫から、ハラールへの理解が深まることも期待したい。また、本章の5節においては、各種「～フリー」表示にも言及しており、「ポークフリーメニュー」、「ミートフリーメニュー」、「ヴェジタリアンメニュー」の3種について述べている。

最後に本書に付随している付録として、付録1「礼拝への対応」、付録2「断食への対応」、付録3「ハラール食材の入手方法と情報サイト」の3つがある。付録1では、礼拝への対応がわかりやすく写真などを用いて丁寧に説明されている。また、お金をかけずにできる礼拝場所の要望への対応についても言及がある。付録2では、断食の具体的な様子と、断食への対応について説明されている。付録3では、ハラールとされる食材を取り扱っている主な店舗やウェブサイトを掲載しており、ハラールな食材を購入したい場合に役立つはずである。この付録には、入門書ならではの親切さが発揮されている。

以上に各章と付録について紹介したが、本書が優れているのは、著者のフィールドワークの事例を交えて、日本でハラールへの対応をどうすべきか、ムスリム側が求める点と日本側のあるべき対応という双方の立場から記している点にある。また、統計データやフィールドワークから得た知見をバランスよく組み合わせ、複雑なハラールの問題について多元的に明らかにしている点が本書の良い点であろう。加えて、本書は著者が重要だと考えている箇所は文字をピンクにするなど、書内での工夫がみられる点も注目に値する。本書は、現在の食のハラールを理解するための非常に意義深い入門書となっている。

地域研究の観点から言えば、本書がインドネシアをはじめとする地域の実態に根差した水準となっていることは大変喜ばしい。その一方で、ハラールの問題は、コスモポリタンな側面を伴っており、ムスリム・ディアスポラやそのコミュニティが果たしてきた役割も大きい。各地域の事例を取り上げた分析に加えて、今後の課題としてコスモポリタンなハラール問題の分析も必要とされる。現在マレーシアをフィールドにハラールについて研究をしている評者は、ハラールの世界的な動向を「グローバル・ハラール・ムーブメント」と規定して分析を進めている。

今後は、このような入門書のみならず、イスラーム圏の事情を踏まえつつ、国際的な視野からハラールを論じる学術的専門書が刊行されていくことを望みたい。

(桐原 翠 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Zamir Iqbal and Abbas Mirakhor. 2017. *Ethical Dimensions of Islamic Finance: Theory and Practice* (Palgrave Studies in Islamic Banking, Finance, and Economics) 1st ed. Cham: Palgrave Macmillan. xv+192pp.

本書は2007年に起きた金融危機とそれに伴った経済的犯罪、そして資本主義における道徳の荒廃などの問題を提起し、イスラーム経済における道徳や倫理、リスクシェアについて論じた書籍である。

本書の著者はイスラーム開発銀行の財務担当副総裁であるザミール・イクバルと、長年、国際通貨基金に務め、マレーシアにある国際イスラーム金融教育センター(International Centre for Education in Islamic Finance, INCEIF)の草創期に教鞭を執った経験のあるアッバース・ミールアールである。両氏はこれまでも共著で *An Introduction to Islamic Finance: Theory and Practice* などのイスラーム金融に関する共著を執筆している。

本書は以下の7章で構成されている。

第1章 倫理と金融

- 第2章 経済と金融における道徳的観念と倫理
- 第3章 イスラームにおけるビジネス倫理の重要な美德
- 第4章 イスラームにおけるビジネス倫理
- 第5章 イスラーム経済及びイスラーム金融の倫理的側面
- 第6章 金融の神聖化——リスクをシェアするイスラーム金融
- 第7章 開発のための倫理的かつ責任ある金融

第1章では、2007年に起きた金融危機やその際見られた経済的犯罪、資本主義の道徳的失敗から、コーポレートガバナンス、社会的責任、持続性を統合する新たな倫理的ビジネスの枠組みの必要性を指摘している。

第2章では、多様化された社会の中でも成立する普遍的な倫理の原理として「自分がしてもらいたいように、他人にせよ」という黄金律を紹介している。この黄金律はバビロン朝、孔子、古代ギリシア、ローマ、ペルシア、中世ヨーロッパ、現代の哲学者、法学者や、社会学者などの言説に遍在しており、またヒンドゥー教、ゾロアスター教、仏教、ユダヤ教、キリスト教やイスラームなどの様々な宗教で神聖視されていることが述べられている。その上で、本書では、貧困や格差に対する有効な手段として、黄金律の経済や金融への適応が提唱されている。

第3章では、イスラームの倫理的美徳において「善い性格の特性」が行動に表出されると考えられているため「行動よりも『善く』あること」が重視されていることが指摘されている。また、イスラームの重要なビジネスにおける倫理的美徳の例として、正しくあること、権利の保護、契約の尊重、誠実さ、信頼性、善良さ、慈悲心と寛大さ、分別と謙虚さ、ビジネスにおける誠意や、協力と連帯などが挙げられている。

第4章では、上述の倫理的美徳をもとに、市場、労働、生産と消費そして再分配、競争と協力、当事者の権利、透明性、リーダーのあるべき姿や、環境への尊重などに対するビジネス倫理の枠組みを作り、それらの個人への内在化と同様に事業体への内在化の重要性を指摘している。そして、その枠組みの普遍的なビジネス倫理への適応の可能性を指摘し、それが現行の経済や金融が直面している倫理的課題に対応できることを述べている。

第5章では、第4章で述べられている枠組みを用いてイスラーム経済の倫理的側面を読み解いている。西欧近代型の金融の抱える、利子ベースの借金の搾取的な側面、实体经济から金融セクターを乖離させる「金融化」(*financialization*)を引き起こす側面、情報の非対称性や、金融抑圧などの課題は、リスクシェアのしくみを重んじるイスラーム金融には存在しないと述べられている。また社会的・経済的正義、再分配の公平性や、所有権の保護を重視するガバナンスなどのイスラーム経済に見られる優位性についても言及されている。

第6章では、さらにイスラーム金融に焦点を当てて議論を展開している。プリンシプル=エージェント理論のインセンティブ問題、金融危機、グローバルレベルで広がった格差とそれに伴う損失や、経済の不安定性などの課題を抱えるリスクシフティング中心の西欧近代型の金融に対し、リスクシェアを行うイスラーム金融はそれらの問題が起こりにくい点で優位性があることが言及されている。

第7章ではトマ・ピケティの指摘した格差拡大を解消するためには開発が有効であり、個人の開発、地球の物理的な開発、人類全体の開発の三つがインタラクティブに関わるイスラーム型の開発の可能性が示されている。その開発の倫理の特徴として、社会的・経済的正義、資源の分配をめぐる公平性、貧困層の金融へのアクセスや、ザカート、サダカなどを用いた富の再分配などを挙げている。

評者は本書の意義は大きく分けて二つあると考える。第一の意義は、現在の経済にも大きな爪痕を残した2007年の金融危機や、現代社会の課題ともされる格差の拡大などの様々な経済問題をリスクシェア、ひいてはイスラーム経済の倫理を用いて統合的に緩和できる可能性を本書が提示している点である。第二の意義は、環境問題に対して言及している点である。第4章の「環境への尊重」の節では、環境や自然資源の保全、それらを後世に残すことが従来型の経済では重要視されていないが、イスラーム経済では、地球の物理的な開発や、過度な消費に対する禁止、後世に資源を残すことの推奨などのイスラームの教えにより、環境保全を重んじていることが指摘されている。環境問題は現代社会の抱える問題の一つであるが、イスラーム経済

関連の書籍で環境問題に関して言及しているものは多くない。そのような中、イスラーム経済と環境の関係性について言及したことは非常に斬新である。今後このように環境問題の議論が展開されることによってイスラーム経済の可能性がさらに広がると考えられる。最後に検討の余地がある点を挙げるとすれば、現代イスラーム金融の実践に見られる、リスクシェアの理念からの乖離についての議論である。本書の一つの大きなテーマとしてリスクシェアが挙げられるが、現代イスラーム金融の実践において、リスクシェアのしくみを取り入れたムダーバよりもムラーバのような商品の転売にもとづく金融商品が好まれて用いられる傾向がある。このようなイスラーム金融の実態と本書で述べられているイスラーム金融の倫理的側面との関係性については、十分に議論しつくされていない点もある。しかし、本書が提示するイスラーム経済に見られる倫理が、単にイスラーム世界のみにとどまらず、現代社会に存在する経済的課題の解決までをも射程に入れていることを考えると、本書の意義は非常に大きいと考えられる。

(川向 善基 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Jeremy Menchik. 2016. *Islam and Democracy in Indonesia: Tolerance without Liberalism*. Cambridge University Press. 221pp.

イスラームと民主主義の関係は、現代のイスラーム思想研究でもイスラーム諸国に関する政治研究でも常に問われ続け、大きな論点となっている。そのような議論において、世界最大のムスリム国家インドネシアの事例が大きな意味を持つようになって久しい。1998年に民主化運動がスハルト政権を倒して以後、インドネシアは複数政党制に基づく民主制を比較的安定して発展させてきた。イスラームと民主主義について語る上でインドネシアを事例として論じることは、イスラーム世界の中での数少ない実践的なケースを取り扱うだけでなく、議会制民主主義の具体的な成功例を分析することであり、大きな意義を持つ。

本書は、ボストン大学助教授を勤める若手の政治科学研究者 Jeremy Menchik の最初の著作である。彼はインドネシアをフィールドとする一方、比較政治学や国際関係論の視点からイスラーム世界や西欧社会をも研究対象としてきた。本書は2017年の世界的な国際関係学会 (ISA) の宗教部門における最優秀賞を受賞しており、著者は今後の活躍が大いに期待できる若手研究者の一人と言える。

まず、本書の内容を章ごとに概観する。

第1章では、理論的枠組みの大まかな紹介を行っている。著者は、インドネシアのムスリム社会が寛容性を強調しながらリベラリズムや世俗主義に反発する事例があることを示した上で、その背景を説明する理論の構築を行っている。その際に、宗教と政治学をめぐる研究に対して歴史的構築主義の手法を適用している。この手法は、宗教的主体を地域的・歴史的な文脈に置き、彼らの取る教義解釈が統治機構や社会のその他の主体との関わりの中で構築されていると見る考え方である。この手法のもう一つの重要性は、あらゆる政治学的な概念や用語が西洋近代的なリベラリズムや世俗主義の「しがらみ」に捉えられているとして、それを脱構築しようとする点にある。ここに、政治学とポストモダニズム、ポストコロニアリズムとの興味深い融合が起きていることがわかる。

第2章では、寛容性がどういう背景に基づき形成されるのか脱構築される。この章では、上記の手法に基づき寛容性形成の理論化が行われている。著者の仮説によれば、あらゆる宗教的政治運動が取る他の宗教・宗派・思想への寛容性は、厳格な神学に基づくものではなく、その運動が誕生した背景や誕生時における他主体との関係性、運動の民族的構成、またそれに基づく制度化と政府との関係性などの経路依存性をもって複雑に形成されてきたとされる。これは、一般的な宗教的主体の理解に用いられる神学、文化、政治体制や合理的選択という捉え方に挑戦するものである。特に興味深いのは、著者が、スンナ派ムスリム組織が特定のスンナ派神学に基づいてあらゆる思想を構築するという、神学の「静的な」捉え方に警鐘を鳴らしている点であろう。

第3章では、上記の手法と理論に基づき、インドネシアの代表的なムスリム市民社会運動であるナフダトゥル・ウラマー (NU)、ムハマディヤ、イスラーム統一連合 (PERSIS) の歴史学的研究と指導者層へのサー